

[023]九州大学教育社会学研究集録表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4773098>

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 23, 2022-03-15. Seminar of Educational Planning, Measurement, Evaluation, Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

第97回九州教育社会学研究交流セミナー（兼：三大学合同ゼミ春の部）

2021年3月29日、「第97回九州教育社会学研究交流セミナー」がオンラインにて実施され、毎年夏に開催される「三大学研究交流セミナー」の春の部を兼ねて行われた。年度末の開催であることや2021年3月に『九州大学教育社会学研究集録』第21号が刊行されたことを踏まえて、本セミナーでは研究集録への投稿者2名と卒業論文・修士論文・博士論文提出者4名、研究構想発表者1名の計7名が研究発表を行った。また、今回は一部を除いて、各研究発表に設定された子メンターが発表に対してコメントする形式を採用した。当日は、三大学以外の先生方、学生の方にもご参加いただき、様々な分野の研究に関して、活発な議論が行われた。

当日のプログラムやご参加いただいた先生方については以下の通りである。なお、所属等は本セミナー実施時点のものである。

<プログラム（敬称略）>

・中世古貴彦（九州産業大学）

「カリフォルニア州における公立研究大学の自律性と州政府の統制—高等教育システムの調整機能の変容と公的使命を巡る相克—」[博士論文]（コメンテーター：橋場論）

・古畑翼（筑波大学大学院）

「大学同窓会組織の逆機能と回避の可能性—米国の知見から見る仮説的条件と日本の国立大学全学同窓会の現状—」[修士論文]（コメンテーター：中世古貴彦）

・木佐貫伊央（九州大学教育学部）

「高校生の進路選択に関する自己語りの社会学—九州大学進学者における制約条件の受け入れの分析を通して—」[卒業論文]（コメンテーター：山田明子）

・徳永真直（九州大学教育学部）

「人材確保法における給与優遇分の縮減に関する研究—教員給与改善措置の政策過程を中心として—」[卒業論文]（コメンテーター：古畑翼）

・陣内未来（九州大学教育学部）

「大学入学共通テストの「国語」記述式問題を巡る受験

対策の「戦略ゲーム」化」[紀要論文]（コメンテーター：徳永真直）

・立石慎司（筑波大学）

「専門職大学・専門職短期大学の教職員組織と教育課程」[紀要論文]

・陣田内美（名古屋大学大学院）

「米国高等教育機関の機能類型と留学生—博士1大学と博士2大学の違いに注目して—」[構想発表]

<発表時間>

博士：1時間（発表30分、コメント15分以内、質疑残り時間）

修士・学部・紀要論文：45分（発表15分、コメント10分以内、質疑残り時間）

構想発表：40分（発表20分、質疑応答20分）

以下に、本セミナーに関する筆者の感想を述べる。

まず、1点目に、自身の卒業論文に対してコメントをいただいたことについてである。これまで完成した卒業論文について発表や質疑をいただく機会は学内での卒業論文口頭試問だけであったが、本セミナーを通じてより長い時間をかけて自身の論文についての議論をさせていただいたことは、大変貴重な経験だった。特に、指定コメントについては、自身の論文について丁寧に読み込んでいただき、貴重なご意見をいただいた。日頃はゼミ内での議論が中心であったため、自身の論文についてある程度理解をいただいている方からご意見をいただくことが多かった。本セミナーでは、学外の先輩から指定コメントをいただき、研究領域が異なる方や初見の方にとって、自身の論文がどのように見られるのかという視点について考えることができた。特に、細かな言葉の使い方や説明に不足が無いか、自身の論理展開に矛盾が生じていないかなどについては、改めて細心の注意を払う必要があることを学んだ。今後自身が執筆する修士論文についても、本セミナーで議論させていただけることを励みとして、しっかりと取り組んでいきたい。

2 点目は、他者の研究発表へのコメントをする経験からも様々な学びを得られたことである。これまで日頃のゼミ活動を通して、他者の研究についての意見を述べることはあったが、研究発表や論文に対して、文章の形でコメントすることは初めての経験であった。このようにコメントをする際には、当然ではあるが、その論文を深く読み込み、取り上げられている先行研究と比べての位置づけや結論がもたらす新規性、問題関心から課題設定や分析方法、分析結果の解釈、結論までの整合性や論文全体の論理構成など、非常の多くの点に着目する必要がある。特に、論文においてなぜそのテーマを問うのか、なぜその課題が抽出されて、その分析を行うのかというような妥当性や説得性のある理由付けの重要性を特に感じた。

このような多くの点に注意しながら論文を読み込み、実際にコメントをするという経験を通じて、自身が実際に研究を行う際や論文を書く際に注意しなければならないことや、自身の研究や論文についてのセルフチェックの重要性を改めて感じた。そして何よりも、自身で研究や論文の執筆を行う以外にも、他の方の論文を読む・コメントをすることも通しても勉強になることを実感した。このように日々の様々な場面や経験において勉強の機会が存在することを意識しながら、何事にも取り組んでいきたいと思う次第である。

最後に、このように各大学から多くの先生方、学生の方と共に研究発表や交流ができる場をいただいていることに感謝するとともに、早期に新型コロナウイルス感染症の収束し、対面の場で合同ゼミや交流セミナーが行えるようになることを願って、以上報告とする。

(文責：修士課程1年 徳永 真直)